

# まんたら通信

第146号 (通巻177号)

平成20年(2008)08月 佛誕2574年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084  
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍涉  
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺  
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040  
URL <http://www.awa.or.jp/home/ryusho/>  
E-mail [ryusho@awa.or.jp](mailto:ryusho@awa.or.jp)



## 曲田のお不動様

白浜ダムの手前、曲田集落から歩いて一〇分ほどのところに、お不動様が祀ってありました。長尾川の支流の源流にかかる滝は夏でも水が涸れることがなく、ひんやりと涼しい風が吹いています。

滝のすぐ下手を切り拓いて、小さなお堂がありました。土地の人のお話では、古老の話として当時正月五月九日の二八日、お不動様の縁日には、近在の漁師さん達などが連れ立ってお参りに来たそうですから、恐らくお籠りをする人や、熱心な信者さんは、滝に打たれて修行することもあったでしょう。戦中戦後のことかと思いますが、お堂が修理出来なくなつて、集落の家々でお守りしたそうです。

世の中が落ち着いた頃、もう一度お堂を

作り直すことになりました。

平成五年十一月のご縁日の二八日に、新しく作ったお堂にお不動様はお帰りになりました。

このお目出度い時に、請われてご遷座の導師を勤めましたが、恥ずかしながらこのようなところに、こんな立派なお不動様がおられたことを知りませんでした。このお堂を作った龍崎さんもお苦勞が多かったでしょうが、上り下りの多い山道の普請をされた地区の皆さんも、大変なお骨折りだったと思います。

それは、つい昨日のことのように思いましたが、あれから早くも十五年が過ぎました。ご他間に漏れず所謂高齢化が進み、足もとの良くない山道をたどつてのお参りは、出来にくくなつてきました。

このままでは、長い間心を寄せ信仰を続けてきたお不動様に申し訳ないことであり、次代に伝える責任もあると相談がまとまり、七月二八日のご縁日に、集落にあるお堂の脇に、今回も龍崎さんが新しく作つたという不動堂に、再度引越してもらふことになりました。

集落の一人は「これからは縁日のお籠りも、みんなと一緒に出来ませ」と喜んでいましたが、ともすれば「お金に繋がらないことは意味のないこと」という世の中の風潮とは違う価値観、「人間の目には見えないけれども、心に感じる神仏の世界がある」という思いが、本当は今一番大事なことではないでしょうか。地区十軒程の皆さんの負担は、きつと大きかったと思いますが、そのお気持ちは子や孫の世代に、間違いなく伝わることでしよう。

それが家内安全や商売繁盛ということであり、とりもなおさずお不動様の御利益ということですね。

## お盆のいわれ

お盆、(詳しい言い方は盂蘭盆)の由来は『仏説盂蘭盆経』をもとにして行なわれる行事です。このお経は『仏説』とは言いがく、中国の事情に合わせて作られたお経、つまり『偽経』といわれますが、方便(真理を指し示すための方法)として広く伝えられています。

お釈迦さまの数多いお弟子の中で特に勝れた十人を「十大弟子」といいますが、そのお一人で神通力第一の摩訶目犍連尊者(パーリ語でマハー・モッガラーナ)、略して目連尊者がその超能力で、亡くなったお母様の行方を探したところ、何と驚いたことに、喉は針の穴のように細り、食べ物が入らぬ餓鬼の世界に苦しんでいました。

因に、ひもじさについて、現在ではさほど実感が湧きませんが、食べるものがないという苦しみは、食料難の戦中戦後を体験した人はおわかりと思いますし、世界に目を向ければお隣の北朝鮮や中国、インド、アフリカ、アメリカなど膨大な数の人たちが飢えに苦しんでいます。寧ろ、食べ残しても当たり前などという、罰当たりな国は例外ですね。

さて、お釈迦さまは、目連尊者のお母様を救うには、修行僧達の雨安居が終わる七月十五日、出来るだけ多くのお坊さんに供養をすれば、その功德によって救われるだろうと教えられました。

而もその功德は、生きてる親に対しては無量の福をもたらす、既に亡くなった先祖たちの精霊には何よりの冥福になるであろうとお示しになりました。

それぞれの土地のしきたりを、出来るだけ丁寧にして、ご先祖をお迎えし、お送りするお盆の行事を、里帰りの次の世代へ伝えるまたとない機会だと思えます。



ホッとしました。而も、民間の私的なことだけでなく、道路を造る時もそういう場所は迂回するのだそうです。イギリスの何処かにもそういうことがあると、司馬遼太郎さんが書いていました。これは山や川にも神が宿る、という日本人の考え方と同じですね。アニミズムだ迷信だといって、「進歩的」な人に嫌われますが、古代からの思いを持ち続けることのほうが、傲慢になりがちな人間には必要ではないでしょうか。◆海岸道路のハマユウです。昨日、炎天下で写してきました。葉が総て綺麗な「無霜地帯」の証拠です。盗掘で絶えかけたものを、砂田敬さんや故人の縫さん達が復活させました。2008/08/09 龍涉

◆一昨日は立秋でした。夏至から40日余り、日暮れもそれと判るほど早くなり、日の影も長くなりましたが、今年の暑さは、これはもう記録的です。現在、部屋の温度は31度。扇風機が回っていますが、気休めでしかありません。そんな中『夏の風邪はバカが引く』といいますが、数日前からその「バカ」になってしまい、熱、食欲は大丈夫ですが、咳が止まらないのが困ります。昨日恐る恐る目方を量ったら45キロピツタリになっていました。棚経という「大仕事」が控えていますから、何としても13日

の本番開始までに治さなければなりません。◆アイスランドという国があります。世界地図を見るとイギリスの北、ノルウェイの西に当たります。北海道と四国を合わせた大きさの島に人口が30万人だそうです。世界有数の火山国で、豊富な地熱や川の水を使って発電したり、家庭の暖房にしたりと最近のエネルギー事情を考えると羨ましい限りですが、「石の中には精霊が住んでいる」のだそうです。樹の精とか川の精などいいますね。「ただ一つの神」以外は認めないキリスト教の国に、こういう素朴な信仰が残っていたことに、驚くと同時に

## 余滴



政治家といわず公務員といわず、経営者から一個人に至るまで、一人一人の国民が皆自分のことしか頭にない今の状態では、遠からずこの国は“沈没”します。

他人あつての自分、ということの正しい意味を静かに考えたいものです。

## 日露戦の武勲に感動再び

大変きびしい状況の下で、一九七四年を迎えるに当り、私は七十年前の日本をふりかえって見たい。当時わが国は強大なロシア帝国を相手に、国運をかけての戦争に突入しようとしていた。御前会議でロシアとの交渉を打ち切り、軍事行動に移ることを決定したのは一九〇四年二月四日であるが、前年末には東郷提督を司令長官とする連合艦隊も編成され、七十年前の元旦は国を挙げて武者振いをするような雰囲気であった。

日露戦争をはじめるに当って、わが国の首脳が外交面と軍事面で示した力量は、まことに驚嘆に値する。特に日露協商によつて何とか戦争を避けようとした元老・伊藤博文が最終的には日英同盟に賛成したあたりや、田村参謀次長が過労で亡くなると、内務大臣の児玉源太郎大将がみずから格下げしてその後任となつたことなどは、とりわけ感動的である。

当時の指導者たちがいかに私心を棄てて国家本位に行動したかは、歴史の誇りといつてよい。田村少将は圧倒的に優勢なロシア陸軍に対して、勝算をせめて五分五分にもつてゆこうとして生命を失い、児玉大将はこれを六分四分に高めるため、やはり寿命を縮めた。一九〇四年二月八日にわが陸海軍が行動を起してから、一九〇五年九月五日にポーツマスで日露講和条約が調印されるまでの一年と七カ月間は、戦争指導の模範である。

政治家と軍人とが、明確な戦争目的を達成するために一糸乱れぬチームワークを果したと、特に陸の大山巖、海の本権兵衛という代表的な軍人が、政治を深く理解して、戦争の収拾にステーツマンシップを発揮したことには、

舌をまくほかあるまい。

七十年前の日本が、なぜこのように立派な指導者を持つことができたかという問題は、じゅうぶん研究に値する。

## 一世代後の驚く逆行現象

特に日露戦争後ほぼ一世代をへた一九三〇〜四〇年代の指導者たちと比較して見れば、両者のへだたりが余りにも大きいのにびっくりさせられる。一九三七年七月に中国との戦争によるめき込んだ近衛文麿や、一九四一年十二月に「清水の舞台から飛び下りる」ような心境でほとんど全世界を敵とする戦争へと自爆した東条英機は、日露戦争の指導者たちと同一民族に属するとは信じられないほど見劣りがする。

特に目立つのは、日露戦争時の指導者たちが、国際的視野も広く、彼我の国力や戦力を比較考察する場合、希望的観測にとらわれず、合理主義に徹していたのに反して、第二次大戦の指導者たちには、尊大で、狭量かつ神がかり的なものが多い点である。一九〇〇年代から一九三〇〜四〇年までの間に、わが国は工業化も進み、教育も普及したはずであるのに、このような逆行現象はなぜ起つたのであろうか？

まず第一に考えられるのは、日露戦争に勝つて、世界の一等国になつたと自負した瞬間に、わが国民の墮落がはじまつたことである。一九〇四年二月二十三日、すなわち開戦後わずか二週間、調印された日韓議定書は、韓国を支配下に置くための第一歩であつた。ポーツマス会議の二カ月余り後には韓国は外交権を奪われて、日本の保護国となり、五年後には併合されてしまつた。そして韓国併合の五年後には、わが国は第一次世界大戦に乗じて、中国に悪名高い二十一ヶ条の要求をつきつけている。みずからの軍事力を過信し

て、まわりの諸国民をつぎつぎと敵にまわした結果が、日中戦争であり、大東亜（太平洋）戦争である。

## 「小国」の謙虚さ生きる

このように、一九〇四〜五年の戦争に勝つたおごりが、第二次大戦での自爆に通じていることを反省すれば、一九三〇〜四〇年代の指導者たちが、一九〇四〜五年の指導者たちに比べてはなはだしく劣る秘密をとくための、少なくとも一つの鍵は手に入るはずだ。個人でも、民族でも、謙遜であるかぎり、視野も広くなれば、科学的な思考力も養われる。七十年の指導者たちは、つねに日本は小国であるという謙虚さから出発したから判断を誤らなかつた。ところが、いつたんおごりたかぶるところ、同一人、同一民族であるとは、到底信じられないほどの愚行をしでかすことになる。一九三〇〜四〇年代のわが国は、陸海軍の強大をほこつていたが、日本軍国主義の脚が実は粘土製であることに気づいていた同胞は少なかった。

一九四五年八月十五日、日本国民はふたたび謙虚の徳を身につけるきっかけをつかんだ。一九五〇年の百億ドルから一九七〇年の二千億ドルまで、わずか二十年間にGNPが二十倍増するという空前の偉業は、敗戦にともなう謙虚さが生み出した成果だといつても過言であるまい。ちょうど一九〇四〜五年の首脳と国民とが、黒船の衝撃以来の謙虚さを備えていたからこそ、日露戦争に勝つたのと同然である。

## 自らの脆弱性に自覚を

この類推は、粘土の脚の上に立つた軍国日本と、同じく粘土脚のGNP大國日本ともあてはまる。自分の脚が

粘土製であることを忘れた軍事大國日本が、つぎつぎに敵をふやして一九四五年八月にもろくも崩壊したように、粘土製の脚の上に立つ経済大國日本は、一九七一年八月の第二ニクソンショックのころから危機に見舞われることになつた。

さいわい粘土脚の経済大國の場合、脚が粘土製の軍事大國と違って、全面戦争に自爆してしまふというおそれはない。指導者も国民も、資源の乏しい日本国の脚がほんものではなくて、粘土製であることを深く自覚して、謙虚の美德を取り戻しさえすれば、わが国は国際社会の尊敬される一員として立派に生き続けることができる。

巨大な経済力を利己的な狭い用途に浪費することをやめて、人類の福祉に役立てるといふ奉仕の精神に徹するならば、アラブ諸国を含めて世界中がわが国との友好関係を求めるだろう。七十年前の指導者たちが、謙遜であつたからこそ、同盟条約で結ばれた英国はもとより、米國までを味方につけ、日本の国際的地位を不動のものにすることができたのと同じである。もしエネルギー危機という形で、赤信号が出なかつたとしたら、経済大國日本は粘土脚のままどこまで暴走したことか、想像するだけでも背筋が寒くなる。

この機会に資源に乏しい日本は、宿命的に粘土製の脚の上に立っているのだという冷厳な事実を直視することだ。みずからの脆弱性を謙虚に自覚してこそ、本當の強さも生れるのである。

(いのき まさみち)

今年7月20日産経新聞『昭和正論座』の転載です。文中にもあるように35年前に発表されたものを、上記の日付で産経新聞が再掲したものです。

猪木正道氏は1914年生まれ。当時防衛大学校長でした。

私も予てから大東亜戦争に敗れたのは、国民一人一人のおごりの気持ちによる、周辺諸国への謂れのない差別意識が原因の一つだつたと思っておりますので、同じ意見を持つものとして敢えて転載した次第です。